

北海道も穏やかな気候となり、過ごしやすい季節となりました。秋といえば、スポーツの秋・味覚の秋・読書の秋というのが定番ですが、今回は少し趣を変えて陶芸体験の特集です。陶芸未経験者の2人が秋晴れの中、美幌町在住の陶芸家 山田光風さんの「北炎窯」を訪れて陶芸の秋を体験してきました。

北海道陶芸の歴史

北海道における陶芸の歴史は、道内に日本各地から移住して定住するようになった江戸時代末期から明治まで遡ります。日本各地の個別の文化が集合し、融合・進化することによって、北海道は独自の文化をつくりあげてきました。道外の窯の多くは、江戸時代から藩の統制下におかれ、その技法などが外に漏れることを極端に制限したことから、その土地固有の窯としての伝統が引き継がれてきました。一方、道内の陶芸は、日本各地の個別の陶芸文化が集結したことから、閉鎖性よりも「多様性と自由な発想」が重要視されてきたという特徴があります。

陶芸(陶磁器)とは

粘土に造形を凝らしてこれを高温の窯で焼成することにより陶磁器を作る技術のことで、焼きものとも呼ばれています。ところで皆さんは、陶器と磁器の違いがわかりでしょうか？

土の成分と焼く温度が大きな違いですが、参考までに簡単な陶磁器の見分け方をご紹介します。まず、箸などで叩いてみる。磁器は陶器に比べて高い金属音がします。次に、湯を注ぐ。磁器は陶器より熱伝導率が高いので熱くなりやすいのです。最後に、光を当ててみる。透けて見えやすいのが磁器です。また、磁器は陶器に比べて約1.5倍の強度があるので、ご家庭にある食器のほとんどは磁器製品なのです。➤



山田光風さん作



夏に開かれた「陶芸市」

▶**乾燥**：成形後、その作品を乾燥させます。

▶**素焼**：素焼きの目的は、粘土を硬化させ、釉薬の水分に耐えられる環境を作り出すとともに、釉薬の付着を良くし、確実な発色を求めることにあります。

▶**釉薬**：素焼きを終えた作品は、釉薬をかけるという工程に移ります。釉薬は、塗るというよりかけることのほうが多く、かける釉薬の種類によって発色の仕方が変わってきます。同じ形の作品でも釉薬の種類やかけ方によって全く違った印象になるので、重要な工程ではありますが、悲しいかな、素人にはこの段階で作品のイメージができません。でも、出来上がりのイメージを膨らませながらの楽しい作業でもあります。

▶**本焼き**：釉薬がけ(施釉)が終わると、後は本焼き作業に入ります。本焼きは、その窯や使う粘土の種類によって違いますが、1200～1250℃の高温で作品を焼き上げていきます。

(萩焼は一般に1210～1220℃で焼成する)

これらの工程を経て作品が完成ということになります。

成形では土との「対話」を、本焼きでは炎との「対話」を楽しみながら、世界に一つしかない作品を作り上げていくのが「陶芸」なのです。

陶芸体験記

まずは、「菊練り」から。この作業、見た目には簡単そうですが、実際にやってみると非常に難しい作業です。粘土の中の空気を抜いて硬さを均一にするための作業ですが、素人が行うとただの土遊びになってしまい、作業前よりも空気が入ってしまう結果になってしまいました。本来は、粘土が菊の形のようになるはずなのですが。



指導していただいた陶芸家の山田光風さんによる菊練りの手本



菊練りを体験

今回の取材にご協力頂いた陶芸家の山田光風さんならびに関係者の皆様方にお礼を申し上げますと共に、紙面の都合上満足な内容をお届けできず、お詫びを申し上げます。ここで紹介できなかったものは当社HPに順次掲載予定ですので、是非アクセスしてみてください。http://www.dobokukanri.co.jp/ ●誌面の情報は、当社職員が独自に取材したものです。発行責任者：斉藤幹次(取締役副社長) 制作：ドボク管理 地域情報誌編集部 (〒090-0801 北見市春光町1-24-3 TEL.0157-26-3321 FAX.0157-22-7508)



陶芸

土との対話を求めて

ご協力・ご指導
陶芸家 山田光風さん
北炎窯(美幌町)

陶芸作品が出来るまで

陶芸で使用する粘土は、大きく分けて赤土と白土があります。赤土は鉄分の含有量が多い土で、白土は鉄分の含有量が少ない土という具合です。赤っぽいから赤土というわけではなく、あくまでも鉄分の含有量による分類なので、含有量が少なければ色が付いていても白土ということになります。鉄分の含有量によって耐火度(耐火度が低いほど窯の高温に耐えられず、へたれて原型を保てなくなる)、出来上がりの作品の色合い(鉄分が多いとその程度により、酸化によって黄～赤茶色になる)が異なってくるため、出来上がりをイメージしてそれに合った粘土を使用します。また、釉薬(ゆうやく)によっても作品の見た目(陶芸の世界では「景色」といいます)が変わってきます。釉薬は数百種類(「北炎窯」では、10～20種類を使用しているそうです)もあり、作品によってその都度使い分けています。使用する粘土・釉薬・焼成時間などの組み合わせで、出来上がった作品の景色は大きく変化するので。➤



陶芸市会場で見えたカラー粘土色見本

次は、電動ろくろに挑戦です！

ここでは「土ころし」という作業を体験しました。ろくろの上に置いた粘土を、遠心力を用いて中心に持っていく作業になります。足踏みペダルで速度を調整しながら、ろくろ上で回転する粘土を上へ下へと動かす作業は、こちらも見た目以上に難しく、終始粘土に遊ばれてしまう結果となりました。

悪戦苦闘する中でふと手を休め周りに目を向けると、工房の中に秋の穏やかな日差しが入り込み、聞こえてくるのはろくろの回る音と外からかすかに聞こえる鳥のさえずり(工房周りの写真)。いつの間にか仕事の事などすっかり忘れ(反省)、作業に集中する自分がそこにいたのです。日常生活の喧騒から離れ、穏やかでゆったりとした時間が流れる工房で、作品作りに没頭できるというのも陶芸の魅力の一つなのかもしれません。

次は、手びねり(手ろくろ)でのコーヒーカップ作りです。まずは、平らな粘土を丸くカットしてカップの土台を作ります。その土台にひも状の粘土を1段ずつ積み上げ、この作業を3～4回繰り返すと湯飲みが出来上がります。後は、取っ手の部分を取りつけてコーヒーカップの完成です。

難しい作業ではないのですが、形を整えるのが精一杯で、手びねりの特徴でもある個性や味のある作品に仕上げる余裕はとてありません。

カップの次は、たたら作りによる受け皿作りに挑みます。板状の粘土をボール状の型に押し当てて、お皿の形を作ります。それをひっくり返して「印花」と呼ばれるスタンプの様なもの模様をつけていきます。この「印花」には北炎窯さんのオリ



カップの原型



持ち手の取り付け



印花押し

今回は、コーヒーカップと受け皿作りに挑戦しましたが、ここで陶芸作品が出来るまでの手順を簡単に説明します。「前業」→「成形」→「乾燥」→「素焼き」→「釉薬」→「本焼き」という工程を踏み、作品が出来上がるまでは、およそ20日間から1ヶ月間かかります。

▶**前業**：粘土の中の空気を抜き組織を和らげ、粘土の硬さを均一にすることです。この作業をおろそかにすると、窯焼き時に空気が膨張して破裂してしまい、場合によっては爆発します。粘土にする作業は「菊練り」という技法を用いますが、「菊練り3年、ろくろ10年」と言われるほどこの作業は非常に難しく、初心者にはまず出来ません。しかし、作品を作る上では大変重要な作業となります。熟練の陶芸家がこれを行うと、粘土が見事に菊の花に似た形になるので「菊練り」と呼ばれているのです。

▶**成形**：ろくろや手びねり、たたら作り等で形を作ることです。一口にろくろと言っても、電動ろくろ(足踏みペダルの調整によって回るスピードが変わる電動式)、手ろくろ(自分の手で必要に応じてろくろを回す手動式)、蹴(け)ろくろ(その名の通り足で蹴ってろくろを回すタイプ)等、用途や地域、窯元によってそれぞれ違います。

電動ろくろは、左右対称の円形の作品であれば、熟練者は1日で200から300個ぐらいは作れるそうです。ただし、初心者には少々難しく扱いはらうとのこと。

「手びねり」は、手ろくろを用いて成形することで、技法としては、玉づくり・ひも作り・掻き出し等があります。陶芸の中では最も簡単な方法ですが、機械作りには無い手作りならではの趣き・味わい・個性を出せるので、美術展等に出品する際には、初心者に限らず熟練者でもこの手法を用いて成形するそうです。なお、体験学習で作ったコーヒーカップは、ひも作りによるものです。

「たたら作り」とは、粘土を板状にし、これを箱形や筒状にしたり、型に押し当てたりして成形する技法で、ろくろは使用しません。コーヒーカップの受け皿は、たたら作りを用いました。



手びねり

ジナルもあり、かなりの種類がありました。ここで何を選ぶかで、その人の個性やセンスが問われることとなります。

創る楽しみ・使う喜び

ここまでで、陶芸体験は終わりです。

およそ2時間と短い体験でしたが、いつの間にか「作品作り」に夢中になっている自分がいて、むかし砂場や砂浜で、つい時間が経つのも忘れて遊んだ子供の頃の思い出が蘇りました。

難しい作業が多く、最初はうまくいかないことが多いかもしれませんが、だからこそ挑戦する楽しみがあり、出来上がる作品に感動するのです。体験の中で強く感じたのは、陶芸の楽しさと奥深さ。どこまで突き詰めても正解はなく、正解がないからこそ自分の個性や感性を大切に作品作りが出来るのが陶芸の魅力だと感じました。

今回お世話になった「北炎窯」

の山田光風さんは、美幌町で陶芸の普及に努められ、1997年、翌1998年に、それぞれ公募オホーツク陶芸展金賞、銀賞を受賞され、2003年に北海道陶芸展文部科学大臣奨励賞受賞、2004年には全道労文展特別賞受賞するなど、輝かしい陶歴をお持ちです。また、オホーツク陶芸会の会長として、陶芸の普及はもちろんのこと人材育成にも大変力を注いでおられます。

今回の特集をお読みの皆様方も、一度陶芸の世界に足を踏み入れてみてはいかがでしょうか？体験してみて感じるものがきっとあるはずです。



完成品

その景色(見た目)は、釉薬により上部に薄いブルーが入り、まるで秋の北海道の青空と雄大な大地を思わせるようです。また、厳しくも私達に恩恵を与えてくれるオホーツク海と砂浜の景色を貼り付けたかのような雰囲気、とても綺麗な作品に仕上がりました。(祭城) 自分で作った喜びと、綺麗な仕上がりに大変感動しました。このカップでコーヒーを飲むのがとても楽しみです。ぜひ、この感動を皆さんにも体感していただきたいです。(公平)